



どの題材。江蘇省と浙江省の境にある太湖に浮かぶ島「洞庭西山」から採れる名石・奇石。美しく装飾が施された廂、長い外廊下、壁にはめ込まれた繊細な篆刻、彫刻の窓枠、どれをとっても二度と作り出せないものばかりだった。しかも、この『北京市文物保護單位』がなんと今取り壊されようとしている。一平方メートルあたり五万元、全部で三〇〇万元の補償費をもらって、私たちは真新しいマンションを買って住むことになってしまった。夫は『柵からばた餅』と興奮しているが、私はこの話を聞いたときからいろいろな思いが錯綜して、一度も気持ちが晴れない。」

「私たちは歴史を全て土の下に埋めてしまつていいのだろうか。」「なぜ政府はこんな大金を払つてまで、庶民を政府から遠ざけようとしているのか。」「このプロジェクトの背後で誰が儲けようとしているのだろうか。」「どうして、住民を追い出さずに建物を修復し、蘇州庭園のように人々の観賞してもらうように利用できないのか?」「北京の文化は過去の写真かドキュメンタリーにしか見つけることができなくなつてしまうのだろうか。」

彼女の思い出は、強大な資本とブルドーザーに押しつぶされようとしている。子どものころ、正月の挨拶回りで巡つたのは、北京の西側西城地区、今の金融街と呼ばれる区域のあたり、どれも中華民国以前の官僚宦官の邸宅が集中していた地域である。ひとつひとつの四合院は、何区画にも広がり、応接室には、紫檀や楠に祥雲、コウモリ、仙鶴の彫刻がはめ込まれた壁があり、どの四合院にも長い廊下があつた。その壁には彫刻や篆刻が優美に飾られ、大きな門の前には様々に趣向を凝らした装飾の施された石堆が置かれていた。子どもたちは院の南か東西の廂房に住み、両親の部屋は第二区画の北屋にあつた。表玄関に近い、第一区画の北屋は応接室、書齋、もしくは「戦略室」で世界地図と中国の地図が掛けられていたものだった。こうしたものは、いま全てなくなつてしまった。

西城地区が伝統的に官僚・政治家の邸宅が並んでいた地区であつたのに対し、北京の東側、東城地区は豊かな商人の居住区となつていた。「私はあまり行つたことがなかつたが、西城地区の四合院の壮麗さ優雅さには及ばなかつたと思う。」彼女自身の実家は、故宮

の東側、王府井の 胡同の家で、もとは清朝徳玲王女の居住地で、共産党政権成立以降は、共産党の創始者のひとり董必武の北京駐在地となつた。その後、聾啞人協会、中国赤十字社の家族宿舍に転用されたものだった。一九五〇年代から六〇年代をここで過ごしたが、ここにも太湖石、水と樹と東間を設けた庭、美しい彫刻を施した窓、娘たちの部屋に使われた屋根裏部屋、長い廊下、そして西洋式の装飾を施された広縁があつた。こうしたものは、一九七八年に全て壊され、整地され、五階建ての簡素な建物が建てられてしまった。当時の北京の住宅問題を解決するためであつた。

時を経て、二〇〇〇年代に入ると住宅の売買が可能になり、一部中国をよく知る欧米人の間では、古い四合院を買い取つて美しく改装し、設備なども現代的なものに取り替えて住む動きがはやつていた。「私のフランス人の友人も、故宮の北、景山公園のさらに北側、山西省駐北京オフィスの向かいの四合院を買つて美しくモダンな建物に改装した。」しかし、二〇一〇年に取り壊されてしまった。景山公園の壁を見えやすくなるため、というのが、理由だった。

当時の写真を眺めると、こここに四合院の面影が写っている。それを見る度に、これまで経験のしたことがないほどに胸が痛む。「こんなことを長々と話してきたのは、今の中国経済を構成する要素にこんなものもあることをぜひ知ってもらいたかつたからです」「でも書けない。ペンをとつて書いてみようと思ひたけれど、やはり書けません。美しく、印象深い文章が書けたらいいのだけれど、やはり無理でした」という返事が結局きた。しかし、私には彼女の痛みをきちんと書ききれる由もない。結局、彼女の語つてくれたとおりに、ここに記してみた。

(わたなべ まりこ／アジア経済研究所 東アジア研究グループ)